

# 尾瀬・檜枝岐という「秘境」の変容

——映像でみる保護と観光のまなざし——

関 礼 子

## 1. はじめに

福島県南会津郡檜枝岐村。人口は約 600 人。日本一、人口密度の低い村である。98%を山野が占める 1 村 1 集落のこの村は、尾瀬<sup>1)</sup>の福島県側の玄関口である。檜枝岐歌舞伎や「伝統的な」生業、文化が残る村であるが、観光が主たる産業となっており、第三次産業への就労人口は 9 割弱にのぼる。

檜枝岐村<sup>2)</sup>は「秘境」「伝統」「民俗」「尾瀬の玄関口」を切り口に、多くの紀行文や雑誌記事にとりあげられ、映像も多数、撮られてきた。国産初のテレビが販売され、テレビ放送が開始されたのは 1953 年であるが、それ以前の檜枝岐の姿も映画などに記録され、残されている。

また、日本百名山の会津駒ヶ岳や尾瀬の山開き、祭で奉納される檜枝岐歌舞伎は、少なくとも福島県内ではニュースの歳時記に外せないし、ドキュメンタリーや旅番組の舞台にもしばしば取り上げられてきた。近年では、光ネットワークを用いた情報基盤整備で N T T 東日本のコマーシャルにも登場した。「テレビや雑誌の取材が来るのに村人が慣れている」というくらい、「まなざし」が向け続けられてきた村である。

本稿は、時代ごとに撮られた映像が残る「秘境」の村、しかも尾瀬という「自然保護の聖地」を村域に持つ檜枝岐村から、民俗や伝統の息づく暮らしが何を表象してきたのかを明らかにする。また、これら映像が村にとってどんな意味を持つのかを考察する。

分析対象とするのは、NHKアーカイブス<sup>3)</sup>に保管されている映像のうち、「檜枝岐」もしくは「桧枝岐」のキーワードでヒットした番組で、かつ NHKアーカイブス学術利用トライアル研究<sup>4)</sup>で視聴可能なデータ形式の 18 番組に、「まなざし」の多様性を示唆する檜枝岐村所蔵の映像 1 本を加えた計 19 本である（表 1）。

## 2. 1950 年代 蘇る桃源郷—山岳映画 フィルムの輝き

### 2.1 塚本閏治と山岳映画

表 1 のアーカイブスの番組には外部制作映像が含まれる。「塚本作品・山岳フィルム（5）～尾瀬沼・尾瀬ヶ原～」である。塚本とは、塚本閏治（1896-1965）。「小型山岳映画の生みの親」である（杉本 1985：176）。

塚本は美術関係の印刷会社を起こした岩三郎の次男として生まれた。幼い頃から自然に親しみ、高等小学校 2 年生（現在でいう小学 6 年生）の頃からカメラを手に山の写真を撮った。1924 年に 9.5 ミリのパテー・ベビー・モトカメラ B 型を購入し、1927 年には初の自作映画『八海山』の上映会を開催した（同上、日外アソシエーツ編 2005：262）。1933 年からは 16 ミリ映画に移行し、生涯に 320 本あまりの山岳映画、スキー映画を撮っている（小泉編 1990：1045）。「真に止み難き日本の山々への思慕」（塚本 1941：はしがき）に突き動かされて多数の映画を制作した彼は、全国各地の山という山に登り、日本山岳写真協会の

長、日本アマチュア・シネ・スライド協会会長、全日本写真連盟理事、山と溪谷社取締役などを歴任した。

その塚本が、四季を問わず出向いていたのが尾瀬であるという。塚本に同行して、青年期のおよそ10年、何度も尾瀬を訪れたという子息の塚本宏氏によると<sup>5)</sup>、塚本は郷土史研究家などと現地集合し、長蔵小屋に泊まり、彼らの調査カメラマンをしていた。当時は、木道のない尾瀬をどこまでも自由に歩き、池塘でリスを追いかけたこともあったという。

NHKに寄贈された塚本の山岳映画のなかで、尾瀬が舞台になっているものが、1951年の『塚本作品・山岳フィルム(5)～尾瀬沼・尾瀬ヶ原～』と1961年の『塚本作品・山岳フィルム(7)～尾瀬～』<sup>6)</sup>で、前者に戦後間もない頃の檜枝岐が鮮やかに映し出されている。

## 2.2 醇美・風雅の村

『塚本作品・山岳フィルム(5)～尾瀬沼・尾瀬ヶ原～』は色彩鮮やかなカラー作品である。そして無声である。この作品が撮影された頃の檜枝岐を、塚本は、次のように表現した(塚本1950:62、但し傍点は筆者)。

「會津風土記に『地盤廣漠殆ど十餘方に渉り四方三里の嶮隘を経るに非んば隣村に出るを得ず、頗る古代の風俗を有せり』とあるが、今日猶其面影を失わない醇美な山村風物を見る事が出来る」

「村人の生業は僅かな畑仕事の他は山仕事为主で、山毛櫨の木で作った杓子には日光みやげや嚴島名物の焼印が押されて輸出される。特に風雅なのは曲輪の手桶で元日に若水と墨書して使い初めとする」

この時期、「有名な国立公園『日光』の裏、尾瀬沼から十六キロメートルほど降りた山の中にある平和なこの『檜枝岐』は、都会の人々によって『桃源境』<sup>(7)</sup>とよばれている純山村」と記されたが

(今野1951:2)、ここでいう「都会からの人々」のなかには、塚本もいただろう。では、塚本が「醇美」また「風雅」と評した民俗のある檜枝岐は、どのように作品に描かれているのか。

## 2.3 フィルムのなかの檜枝岐

『塚本作品・山岳フィルム(5)～尾瀬沼・尾瀬ヶ原～』には「尾瀬を回る旅」と「春雪の尾瀬」「尾瀬の秋」が収められており、檜枝岐が登場するのは3部構成の「尾瀬を回る旅」である(表2)。沼田駅からバスに乗り、三平峠から沼尻の長蔵小屋で宿泊。燧ヶ岳に登り尾瀬ヶ原をめぐって檜枝岐に出るコースが紹介されている。

湿原に自由に出入りできた尾瀬で、魚をとって遊ぶ子供たちや釣りの様子、長蔵小屋の人々、ナデッ窪からの燧ヶ岳登頂、檜枝岐小屋や弥四郎小屋、温泉小屋の人々、ハッチョウトンボをつかまえ、湿原に遊ぶ様子が楽しげに映し出される。そして、裏燧を回って七入に至る。七入からは、村人がリヤカー<sup>7)</sup>に人を乗せて檜枝岐へ運んでいく。

それから、いよいよ檜枝岐の本村が登場する5分28秒がはじまる。

会津駒ヶ岳を背景にした村なみ。まだ自動車が入る前の旧道沿いに廟所や板倉、前掛けをして手ぬぐいを被った六地藏が佇む。生活用水として使われた堀(ホリッコ)には、水力を利用して粉をつくパッタリがいくつもある。若水桶で水を汲む人もある。

檜枝岐名物は、冷水で締めたそば粉10割の「裁ちそば」である。布を裁つようにそばを裁ちながら、裁ったそばが乾燥しないように、フキの葉(フーキッパ)で覆う。老舗「丸屋」のそば打ちである。

気持ちよさそうに露天で桶の風呂につかる村人の脇を通り、杓子小屋を訪れ、作業風景をみる。そうして最後に、大きなフキを傘のようにさし、等間隔に並んで橋を渡る一行がロングで捉えられている。

## 2.4 汚れなき山と檜枝岐

都会から遠く離れた鄙の自然や風土、人々の暮らしをいつくしみ、そこにある趣に価値をおき、そのままに保たれて欲しいと願う「まなざし」は、早い時期からあった。

たとえば、1920年の『山岳』<sup>8)</sup>には、「檜枝岐の村はいゝ。随分不自由な邊鄙な山村のやうな話であつたが、宿屋なんか決してそんなことはない。食物だつて相當だし、座敷だつて廣いし、菓子だつてある」、「晩には特別の御馳走の蕎麦が出る。色は黒いが馬鹿にうまい。あきれる程おかひりする者もある。檜枝岐へ來たら是非味はつてみなければならぬものであらう」と書かれている（戸澤1920:101）。疎ましいのは「いまはしい都會の風が入つて來ること」だが、交通不便のため「流行性登山熱病患者」がまだ來ないので当分は汚されぬ山だろうと続く（同上:101-102）。

塚本が映した檜枝岐は、カラーフィルムの効果もあるだろうが、明るく、瑞々しい活気に溢れている。村人は朴訥とし、健康そうで、陰らない笑顔である。塚本が檜枝岐に向けた「まなざし」は、近代登山が育んできた自然を賛美する心性や、「野の学問」としての民俗学や郷土史の隆盛と無関係ではないだろう。

尾瀬は、既に開発に抗って自然を守るための年輪を刻んでいた。長蔵小屋の平野長蔵は1914年に「植物を猥りに採取せぬこと」と張り紙をし、1920年には尾瀬沼一帯を風致保護林にするよう陳情した。水力発電計画に抗い、尾瀬は国立公園に指定された。にもかかわらず、1948年には巨大水力発電所計画が持ち上がった。翌1949年につくられた尾瀬保存期成同盟を母体として日本自然保護協会が結成されたのが、まさに塚本が檜枝岐を撮影した1951年である。尾瀬に足しげく通い、郷土史家らと尾瀬で待ち合わせをしてカメラマンをしていたという塚本が、こうした保護運動や尾瀬をめぐる状況、民俗誌や山岳雑誌に紹介された檜枝岐村の伝統文化に無関心であったとは考えられない。

塚本の山に対する純粋な「思慕」は、山麓の村の暮らしにも寄せられ、後の観光映画以上に檜枝岐を魅力的なものとして描き出している。

## 3. 1960～70年代 変貌する「秘境」

### 3.1 情報の波と電源開発で潤う財政

1960年代の高度経済成長期につくられた『日本縦断～福島』（1961年）と『続・日本縦断 会津～東北編（7）』（1963年）は、ともに「変化」をテーマにした番組である。

『日本縦断～福島』は、交通の要所である福島市から磐梯吾妻有料道路（スカイライン）<sup>9)</sup>を通して、「電源の湖」の猪苗代湖、歴史と伝統の会津若松、そして奥会津の檜枝岐と只見川電源開発を紹介し、最後に常磐地方の炭鉱不況を火力発電所の好況がカバーしている状況を描き、次のようにまとめる。

「関東、東北の交通路として、政治、経済の中心となる中通地方観光や電源開発で変革を遂げて行く会津地方、工業地帯として目覚ましく発展する浜通り地方、福島県は、東北というよりもむしろ南へ顔を向け、関東経済圏に加って将来を決しようとしているように見えます。

それだけに、日本の地でしばしば見かけるような、観光や、近代産業の発展の谷間で、一部の人たちだけが取り残されて行く悲劇はこの福島の上にくり返したくないものです。」<sup>10)</sup>

「東北地方特有の後進性」は県の82%を占める山林地帯に姿をとどめるとし、取り残されることが懸念されているのは、たとえば阿武隈山脈（阿武隈高地）の集落である。檜枝岐村は、テレビの普及と奥只見ダムによる税収増で急激に変化している。村には「50台近くのテレビ」があり、「地勢の関係で、東京地方の電波が直接受信できる」。「1千万を超える税金」が入ることになり<sup>11)</sup>、村は「豊富になつた財政とテレビがもたらす文明

の香りを裏付けにして」生活改善に着手し、村営の製材所を設ける<sup>12)</sup>。「こうして得た金で村の人は配給米を買って常食とし、かやぶき屋根をトタンにふきかえるなど、生活様式は一変」したと説明される<sup>13)</sup>。

ここで、「秘境というに相応しい生活」の背景に流れる映像は、アワを干す風景、六地藏のある村なみ、バッタリのある風景、そば打ちの映像である。変化を語るの、ボール遊びをしている子どもたちの姿や、先生と一緒にテレビを見る子どもたち、製材所で働く村人の面々である。また、関東に顔を向けて変化しようとしていることは、奥只見ダムの電力が関東に送電されること、製材所で「テレビの脚に使う丸棒を生産して採算も明るい」ことに表象されている。

東北ではなく関東に顔を向けようとしていると括られた檜枝岐であるが、常磐地方がそうであったように、実はもともと関東との経済的な結びつきが強く、沼田街道で群馬県の片品、引馬峠を越えて栃木県の日光に至る道は交通の動脈であった。にもかかわらず、改めて関東に顔を向けて変化していると語られたのは、従来とは異なり、そこにある種の従属関係が垣間見られるようになったからであろう。

### 3.2 粘り強く耐える古い伝統の生活

『続・日本縦断 会津～東北編 (7)』は、火山噴火や凶作などの災害にみまわれながらも、粘り強く暮らしを営んできた会津の人びとの生業、祭り、歴史や景勝地に、いわば「観光のまなざし」(アーリ 1995=1990) が向けられるなかで、「いささかの変化も」なく続く「古い土地の生活」に光をあてている<sup>14)</sup>。そして、「古い歴史を持つ生活と、美しい自然がそのまま残り、独特の風土を形成」している会津に、今なお「歴史を築き伝統を支えて来た会津魂」が生きているとみる。この会津魂が、「東北の人共通のねばり強さ」に加え、会津の人が持つ「骨っぽさ」から生まれる「郷土愛と強い信念」に重ねられるのである。

そこでの檜枝岐は「満足な稔りも得られず、交通も不便であったに違いないこの山の中に、なぜ人が住みついたのか。権力に追われた者の『かくれ里』としか、解釈の仕様がないう程、生活の場としては、条件の悪いところ」だと説明される。「少ない畑」「石の混じったやせ地」をテコグワで耕す村人、「淋しげな微笑」と形容された路傍の石仏や六地藏、茅葺き屋根の家や軒先に干しているトウキビ(トウギミ)は、条件不利地としての檜枝岐を印象付ける効果を持つ。

水田がなく、主食はアワ、ソバ、ヒエだという食文化で取り上げられるのも、名物の裁ちそばではない。山の暮らしを表すと説明されるシトゲ(オシトゲ)である。粉をひき、練り、シトゲを焼く様子、傍らで子供が本を読み、遊ぶ風景に、「アワに米を加えて石臼でひき、その粉をねってから、イロリの火で焼くというもの」「携帯に便利なところから、昔は山仕事の弁当に用いられた」「今ではさすがに、主食にこそなっていますが、それでも子供のおやつには、よく作られている」と説明される<sup>15)</sup>。裁ちそば以外の食文化が価値づけられるには1980年代を待たねばならない(後述)。

さて、板倉集落が独特の景観をつくる檜枝岐では、大火が災害としてクローズアップされる。板倉は、火災から家財を守るために、集落から離れた場所にたてられた。たびたびの大火からの「在地リスク回避」(菅 2000)である。番組は、こうしたローカルな知恵にかわり、新しい技術=消火栓が村を守るようになったのだと語り、村のあちこちにある消火栓を映し出す。

『続・日本縦断 会津～東北編 (7)』のなかの檜枝岐には、塚本が記した「醇美」「風雅」や、『日本縦断～福島』で紹介された財政的な豊かさは感じられない。新旧の対立のなかで、「凶作とキキンに見舞われた東北地方」「せまい高冷地に閉じこめられた檜枝岐の人の苦勞」など、負の側面が強調されている。



### 3.3 檜枝岐の奥山が尾瀬である

1960年代の檜枝岐村を変えていくのは、テレビと奥只見の電源開発だけではなかった。自動車道が整備され、永久橋が次々と完成した。村営の尾瀬沼ヒュッテ（1964年竣工）や御池ロッジ（1967年竣工）など、観光基盤が徐々に整備された。鬼怒川と檜枝岐の間を東武の急行バスが走り（1966年）、檜枝岐から尾瀬・御池まで会津バスが運行した（1967年）。尾瀬分水計画や道路建設に反対の声が聞こえる頃である。<sup>16)</sup>

こうした時期に、観光映画コンクール（第10回）<sup>17)</sup>で優秀賞を受賞したのが、『奥会津～檜枝岐から尾瀬へ』（1964年、大和プロダクション）である。仙台鉄道管理局と福島県が企画したこの観光映画は、「内容的にも充実していて、いわゆる秘境に対する興味をそそるが、それがただの観光宣伝だけに終わっていないのは、そこに住む人たちの生活で、巧みに結んでいるからである」（大内1965：94）。では、檜枝岐の生活はどのように描かれたのか。内容を概観していこう。

会津駒ヶ岳など山々に雪が残るが、「秘境の部落、檜枝岐村」<sup>18)</sup>は緑の装いである。茅葺き屋根の家や出作り、ヘラや杓子、「実用品から民芸品に」なった曲げ輪づくり、「世間にも広く知られている」裁ちそばづくりが紹介される。「辺境に生きる」人びとは山の豊かさを享受して生きている。イワナやニジマス釣り、サンショウウオをとって「生活の糧のひとつ」としている人もいるし、この「平家の落人部落」は「マタギの一族」でもある。檜枝岐の奥山は「自然の宝庫」で「尾瀬の大部分は檜枝岐村に属する」。ここに檜枝岐から燧ヶ岳を一周するコースもつくられた。

会津尾瀬号やバスが運行され、「檜枝岐は、秘境といっても、もはや交通不便などところではない。表通りには都会からのお客を迎えて忙しくなる」。バスで大勢の客がやってくる。名物のそばを食べる。まさに「檜枝岐は現在の息吹をいやおうなく呼吸し、過去から現在への転換期にたっている」のである。

次に燧ヶ岳裏燧の御池から三条ノ滝、平滑ノ滝、山小屋に宿泊して尾瀬沼へといたる燧ヶ岳を回るコースをカメラが追い、盆に檜枝岐歌舞伎を楽しむ村人たちの様子が紹介される。そして最後に「檜枝岐から尾瀬に通じるコースが都会の人にとって、手近なものとなった今日、檜枝岐は年ごとに姿を変えてゆかねばならないであろう。しかし、この土地にしがみついて生きることを受け継いできた村人にとって、この土地と密着した生き方の知恵の積み重ねは、すべての生活を急には変えられない。人びとは秘境の素朴さをいつまで守り続けていくのであろうか」と括る。

この観光映画で注目したいのは、第1に、尾瀬山麓の村とか尾瀬の玄関口という表現で尾瀬に檜枝岐を従属させるのではなく、逆に、檜枝岐の奥山が尾瀬であり、檜枝岐に尾瀬が属するのだと表現している点である。また第2に、村が変化しても、村人の生活や民俗、秘境の素朴さは保たれていくだろうことを期待を込めつつ、示唆している点である。

### 3.4 貧しさを背負ってきた村

もうひとつの「奥会津」がある。『新日本紀行 奥会津』（1967年）は、電源開発でできたダム周辺の送電線を守る人びとや、ダムの補償で変化していく奥只見の暮らし——冬の祭、狩猟や漁撈、花嫁行列の様子など——を紹介し、重苦しい音楽とともに檜枝岐村を映し出す。そこは「バスも通らぬ、さながら陸の孤島」「深々とした雪をかぶって眠った伝説のような村」である<sup>19)</sup>。旧正月、家のまわりに若水をまき、そばを打つ。昔語りを子どもたちが聞く。村歌舞伎で日頃は疎遠な親類に会う。

そうした様子のなかに、さりげなく貧しさのエピソードが挟み込まれる。いわく、村の石仏の由来を村人に聞くと、凶作と度重なる大火で「飢え死にする人が数限りなく」でたことを語ってくれるだろう。最近、ようやく米が持ち込まれ、ダムの補償で村は潤うようになった。村が豊かになっ

て進学する子どもが増えたが、戻ってくるのは僅かで、「村が寂れるのは忍びない」という声も出る。

「貧しくとも親と子が共に暮らせる村であったほうがいいのか。それとも子ども達には、もっと恵まれた環境が与えられるべきなのか。生まれ育った村を離れていく若者にとって、故郷とは、それでは一体、何なのでしょう」

檜枝岐は貧しい村として描かれる。ここでの「秘境」は桃源郷ではないし、自然の宝庫を持つ村でもない。交通不便な地方は過疎を運命づけられているかのようである。だが実際は、凶作で飢饉のときに間引かれた子どもの霊をなぐさめたのは江戸時代につくられた六地藏で、石仏については聞かない。既述のように、戦前から「食物だつて相当」であったし、「米がとれない村の米食」を記した文章も多く残されている（檜枝岐村民俗誌編さん委員会監修、関編著 2014）。貧しさを背負ってきた檜枝岐というフレームには、交通網の発達から取り残された不便の地に貧しさを重ねるまなざしが投影されているのである<sup>20)</sup>。

ところで、NHKの『新日本紀行』は、1963年から1982年までに、794本が放送されており、檜枝岐が舞台になった番組がもうひとつある。夏は出作り小屋で畑を耕し、冬は本村に戻る出作りの生活を追った、『新日本紀行 出作りのころ〜会津・檜枝岐村〜』（1972年）である。

1955～1965年（昭和30年代）のレジャーブームを背景に、山村では観光開発と観光産業が「住民の経済にとって第一義的なものになっていく」のだが（徳久 1981：134）、1970年に檜枝岐村もいよいよ観光立村の方針を明確に打ち出した。村内に民宿をつくり、村主導で観光客の誘致に乗り出したのである。ちょうど国鉄が「ディスカバー・ジャパン」のキャンペーンを始めた年であった<sup>21)</sup>。

番組がつくられた時期には、「カヤブキ屋根が

姿を消し、秘境のイメージはなく」なった。六地藏のいわれが物語るような貧しさからの変化である。「村人が生きてゆく為には、どうしても、本村以外に耕地を求めて出作りをしなければ」ならなかったし、「自然の恵みの薄い村で、山の本だけが僅かな救い」だった。ヘラ・杓子づくりはその名残だが、「手づくりの味が見直されて都会の民芸品店から引合いが来る」。主要な現金収入源である。「割に合わない出作りに見切りをつける人が増えて、出作りには、年寄りだけが行く」ようになった。

檜枝岐の春。出作りの準備をする老夫婦は、春の鎮守神の祭礼での奉納歌舞伎が終わると、出作りに向かう。村の観光化の過程で、「貧しい食生活のなかで、長い間、主食だった手打ちそばが、こんどはひとつの観光資源として村を潤す」ようになる。出作り小屋での老夫婦は、「誰にも干渉されない気ままな生活」である。「飢えをしのぐための出作りが、今では老後の楽しみに変わ」った。他方で、出作りをやめた家を村が借り上げて、貸別荘にする動きもでてきた。「長い間、貧しさに耐えてきた檜枝岐村は、新しく生きる道を観光事業に賭けようとしている」、そして、「村の歴史そのものであった出作りは、やがて昔語りに」なっていくのである。

#### 4. 1980年代～2000年代 自然に根ざし、伝統を継ぐ村

##### 4.1 檜枝岐に残る知恵と「伝統」

みてきたように、1960年代から70年代にかけて、檜枝岐は変化のなかでまなざされてきた。ここでの檜枝岐は、一方で「自然の宝庫」を持つ村であり、他方で「自然の恵みの薄い村」である。ダム開発で経済的に潤う村であり、若者の流出してしまう寂れゆく村である。貧しさから豊かさへの変化の中で、昔ながらの生活が変わらずに残っていくだろう村であり、昔ながらの生活が失われていく村である。そうした檜枝岐のアンビバレン

トな描かれ方は、高度経済成長期によってもたらされるものと失われるものが、「秘境」の行方に投射されているかのようである。

それに対して、1980年代からの番組は、郷土や地方の基層文化を示すもの、また山村の知恵の象徴として、都市にはなく、地域に独自に残るもの——しばしば「伝統的な」と表現されるもの——にフォーカスした。貧しさではなく、「観光のまなざし」が向けられるような魅力的なものとして、生業や食、歌舞伎が捉えられるようになった。

#### 4.2 自然に交わる生業

山村では、季節ごとに多様な生業が営まれてきた。狩猟や漁撈、畑仕事にヘラや杓子づくりといった山仕事など、いくつもの生業を組み合わせ生活で営んできた。そのなかで番組がメインに取り上げているのが、サンショウウオ漁とイワナ釣りである。

『につぼん列島朝いちばん 自然ふれあいの旅 雨の檜枝岐にサンショウウオを追う～福島県檜枝岐村～』（1986年）は、星寛氏のサンショウウオ漁を紹介する。新緑のハルゼミの鳴く時期になると、星寛氏は沢の出口にある小屋に寝泊まりしてサンショウウオを獲り、燻製をつくる。「気ままなひとり暮らし」である。寝泊まりするのは2カ月足らずだが、「苦楽を共にしてきた小屋」では、「10年前、20年前の出来事がいつでも思い出せる」。あちこちに、「どの沢に何日に入って、何日に終わったと。その間に何日に大雨が降ったと」といった記録がメモ書きされているからである。日照り続きで雨が降らないと漁はできない。サンショウウオの燻製づくりは休みなしだが、雨を待つ日はイワナ釣りをし、晩の「おかず」にする。

この番組のなかで、星寛氏の「本職」は曲輪づくりだと紹介されている。曲輪は1970年頃にはじめた、星寛氏にとっては新しい仕事である。彼が1972年の『新日本紀行 出作りのころ～会津・檜枝岐村～』で、出作りの生活を続ける老夫婦の

息子として登場した際、サンショウウオ漁は木材伐採や人夫仕事とならび、一家の主な収入源だった。それが、「気ままなひとり暮らし」になったのは、漁が生計に占める重要度が小さくなったからである。

それから約10年後の『水と漁の旅 山椒魚漁～福島県・檜枝岐川』（1997年）では、「江戸時代からサンショウウオを獲ってきた」が、サンショウウオ漁師は僅かになってしまったと紹介される<sup>22)</sup>。この時期、もはや小屋に泊まりがけでの漁はない。映像に登場する漁師は星寛氏より7歳若い平野郁文氏で、かつて8時間かけて登ったという山道に車を走らせて、沢の近くまで行き漁をする。時の流れの中で、漁が様変わりしていることがわかる。

檜枝岐にはイワナ釣りの太公望たちが訪れる。『につぼん列島朝いちばん イワナ釣り名人 山小屋ぐらし～福島県檜枝岐村～』（1987年）は、88歳になる平野惣吉氏（故人）の山小屋での暮らしが描かれる<sup>23)</sup>。みている人の「人生観」が変わるかもしれない、「住まいから何から自然と触れ合って」いる、「人生の達人」の生活である。

平野惣吉夫妻は、毎年、5月になると、電気も水道もない、檜枝岐の本村から30キロ離れた山中の小屋に移り住み、10月に山を下りる<sup>24)</sup>。「僅かな平坦地を開墾」してヒエや野菜をつくり、春は山菜、秋はキノコ、イワナ釣り。「ほとんど自給自足の生活」をする。

14歳から竹竿を握り、釣りの道具も自分でつくる。88歳に至るまでイワナ釣りをしてきた平野惣吉氏は、6年前に「日本一どころか世界一」の大イワナを釣り上げたのが語り草だが、今年は40センチで満足いく大きさではなかった。「もっと大きなイワナがいつの日かきっと釣れると信じて」いる。

都市部の「せかせかした人生」とは異なる生き方を通し、取材にあたった記者は次のように語る。

「惣吉ジイさんはおっしゃっていましたね、

私の人生を決めたのはイワナだ。イワナがオレの人生を決めてくれたと。自然の厳しさもご存じですが、まだまだ開発の波に押し寄せられていないなかで、厳しさと豊かさのなかで、ちょっと病気もしましたけれど、生活なさっていました。うまいものを食べては良くないな、とも言っていました。まず日本一のイワナを釣った惣吉さんですが、人生の達人でした」

「電気も電話もない」山小屋で暮らす平野惣吉夫妻に、本源的な人の生き方をみて、便利な都市での生き方を省察する。檜枝岐の村からも離れた「秘境とっていい」山奥での暮らしを語る口調に、「貧しさ」はない。

#### 4.3 自給自足と郷土食の魅力

平野惣吉氏の「うまいものを食べては良くない」という言葉は、「おかずは全て自然食品。川の幸と山菜にキノコ類」を食べて「二人とも長生きしている」というところからきている。買って食べるのではなく自給自足、地のものを食べる地産地消が健康的であるということである。

ところで、サンショウウオ漁やイワナ釣りは、檜枝岐の観光につながっている。サンショウウオの天ぷらやから揚げ、イワナの刺身や塩焼き、焼いてほぐしたイワナにネギなどを加えて味噌で味付けした岩魚味噌などが、豊富な種類の山菜やキノコ料理とともに民宿・旅館で提供される。これに従来、米の代用食扱いされたそば料理を含めたものが、「山人料理<sup>やもうど</sup>」という名で提供されるようになった<sup>25)</sup>。

『きょうの料理 この土地この味 山人たちのそば料理 福島県・檜枝岐村』（1989年）は、檜枝岐の暮らしとともに山人料理を紹介する。「山人」とは、食糧を背負って山の杓子小屋で、ヘラ・杓子をつくった男たちを指す。檜枝岐には「先人の知恵と工夫で生み出され」、受け継がれている山人料理がたくさんある。番組は、9月下旬からはじまった出作り地でのソバの収穫や、ソバを干す

風景、キノコとりや杓子小屋の仕事風景を紹介し、「命の糧であり楽しみ」だった「とれたばかりのそば粉をつかった料理」の数々をみていく。

裁ちそば名人で民宿の女将、60代の星トヨ子氏（故人）がつくる、根菜たっぷりの、そば粉でつくったすいとん、「つめっこ」。じゅうねん（エゴマ）をまぶした「はっとう」は、「昔、上官が来まして、これをお出ししたら、平民はこんな美味しいものを食べてはいかと御法度になった」ことから名づけられた。囲炉裏の火で焼いてネギ味噌を塗った「でんがく」、昔は熱い灰のなかに入れて焼いた「やきもち」には、菜っ葉や、朝にとったヤマグミのあんが入っている。そば粉料理のほかにも、うる米をついた「ばんでいもち」、シシダケ（コウダケ）の混ぜご飯が紹介される。

「おんなじものでは飽きますから、昔はいろいろなもの、作り方を変えて食べるしかなかったでしょ。どんどん檜枝岐もなかなか世代がかわっていきますと、こういう料理もできる人がすくなくなってきますでしょ。若い人たち、自分たちのためでもあればお客さんのためでもあるから、一生懸命勉強してやってほしいです。」

檜枝岐の食文化が観光資源となり、民宿という生業を通して食文化が受け継がれる。最後に星トヨ子氏は「そばは体にいいですから。檜枝岐は元気です、年寄が」と語る。確かに、イワナ釣り名人の平野惣吉氏も人生現役で、自分の生活スタイルを楽しんでいた。檜枝岐の山人料理は健康に良い。だが、それぞれの時代の番組をつないでみると、それ以上に個々に修得してきた技があり受け継ぐ人がおり、個々の人生の歴史がありそれを学びとろうという人がいることこそ、元気の秘訣と思われる。

『今夜もあなたのパートナー1 そばの匠を訪ねて 平野八千代 福島県檜枝岐村』（2000年）では、そば打ち名人の平野八千代氏が、さらりと「そば打ちは習うより慣れ。うちの孫なんか、結構、で



きますよ」と語る。「そば打ちができないとお嫁に行けないと言われた檜枝岐村」の「ぬくもりのある味」は、次世代に受け継がれているのである。

#### 4.4 変わる村・変わらない村

旅番組でも、檜枝岐の生業や生活風景が紹介される。『ひるどき日本列島 尾瀬・夏だより 福島・檜枝岐村』<sup>26)</sup> (1994 年) や『ひるどき日本列島 遊ぼうよ 檜枝岐村 福島・檜枝岐村』(1994 年) では、マキが積まれた風景、ソバの実を干す風景、サンショウウオの燻製づくりや山人料理、川にカゴ渡しがかかる風景、溪流釣りや民宿の手作りの風呂が映し出される。

1990 年代、檜枝岐を訪れる観光客はピークを迎えている。観光化に伴い、檜枝岐の生活風景も徐々に変化してきた。堀からはバッテリーが消え、出作り小屋で半年を過ごす人もなくなった。

だが、変わってもなお変わらない生活がある。『ふだん着の温泉 尾瀬の麓 父と子の湯～福島・檜枝岐温泉～』(1999 年) は、出作り同様に半年間、村を離れる山小屋の家族の風景を取り上げている。夫婦で尾瀬の「燧小屋」を切り盛りする夫婦は、半年間、小学生の息子と離れ離れの生活を送る。「子どもにはかわいそうだと思うが、小さい時、自分も同じように育ってきたから、多少、仕方ないというか、子どもに我慢してもらっています」と語る父。「私もそのように育ってきてますから、そのぶん秋はうれしい、春は少しさびしい」という母。山小屋の客足が途絶えた日に檜枝岐に下りてきた父と息子が村の温泉浴場で湯につかる、という内容である<sup>27)</sup>。

山小屋を営む人は、子どもが小学校に入学する前は家族みなで夏に尾瀬に移り住み、小学校に入学後は祖父母に子どもを託して本村を離れる。親の世代もそうであったし、子の世代もそうである。やがて中学校を卒業すると、山小屋の子どもだけでなく村の子どもは、親元を離れて進学する。だからこそ、檜枝岐では、いずれ村を出て行く子ども達を村全体で育てている。

#### 4.5 伝統を継ぐ村

観光は制度的な保護を推し進めていくという特徴がある (関 2012)。1970 年から観光に舵を切った檜枝岐村は 1969 年に釘を使わない「せいろ造り」の板倉、曲屋、そして檜枝岐歌舞伎を村の文化財に指定した。歌舞伎の舞台は 1976 年に国の重要文化財に指定された。

『新日本紀行 出作りのころ～会津・檜枝岐村～』が制作された 1972 年、歌舞伎はまだまだ「村人たちの唯一の娯楽」だった。江戸時代から続くという歌舞伎に明確な「観光のまなざし」が向けられたのは、1975 年である。国鉄のディスカバー・ジャパン・キャンペーンで、檜枝岐歌舞伎が取り上げられたのである。

観光化のなかで、歌舞伎は村民の娯楽から観光資源へと変化していく。『日本列島ふるさと発スペシャル 檜枝岐歌舞伎～福島県・檜枝岐村～』(1991 年) は、歌舞伎の開演を待つ人びとに、「カメラを構える人が多い」こと、「かつては境内の半分で、ちょうど村民が入れた」が、観光客が増えたため、「後に 10 メートルほど舞台をずらした」ことが語られている。

檜枝岐の観光に欠かすことのできない伝統の歌舞伎は、千葉之家花駒座の座員によって演じられる。役場職員や民宿の経営者など、座員はすべて村民である。歌舞伎は観光客を呼び込むが、肝心の後継者がなかなか出てこないのが問題になった。『小さな旅 村歌舞伎 ふるさとの青春～福島県檜枝岐村～』(1998 年) は、高校や大学を卒業して村に戻り、歌舞伎を受け継ぐ 3 人の若者たちを追った番組である。「せっかく檜枝岐にいるんだから何か役にたてれば」と歌舞伎をはじめた若者たちは、「立派にやり遂げたい」と練習に励む。稽古をつける先輩も「後継者が育ち、心強く思っている」。舞台がはじまり、檜枝岐歌舞伎は若者たちとともに「新しい一步を踏み出した」。こうして「故郷を思う気持ちは受け継がれて」いく。

1975 年のディスカバー・ジャパンのポスターには、歌舞伎衣装の女役者が生まれたばかりの赤

子を抱いた写真が用いられている<sup>28)</sup>。その赤子が3人の青年のひとり、星勇人氏である。初舞台を踏んだのは7歳。村に戻った彼に稽古をつけていたのは祖父である。この番組で親子3代が現役の座員だった星勇人氏は、『ホリデーにっぽん ふるさと歌舞伎 東京へゆく』（2004年）では、現役親子4代の座員として登場する。東京国立劇場での歌舞伎公演で、7歳の息子が初舞台を踏むのである。「上の人との交流といった縦のつながりを感じて歌舞伎を好きになってくれればいい」と語る彼は、次のようにも語っている<sup>29)</sup>。

「残さなきゃいけない、伝えなきゃいけない。歌舞伎が好きなのと意地でしょうね。」

「伝統というのは一回途絶えたら終わりだから。260年続いてきているけど、ここで終わっちゃったら終わりなんだから。復活は伝統じゃない。」

伝統を残すということは、先達の知恵や技に価値をおき、学び、伝えていくという、世代を超えた人間関係のつながりである。観光化による変化にもかかわらず、むしろ観光化されたからこそ見いだされ、守られるものがある。食文化や歌舞伎はその例である。先達の歩みを次世代が引き継ぐことで「伝統」は「伝統」となり、次世代に引き継がれることで「伝統」は「伝統」として重みを増す。

『新日本紀行ふたたび NHK アーカイブス 歌舞伎が伝わる村 福島県檜枝岐村』（2007年）は、『新日本紀行 出作りのころ～会津・檜枝岐村～』の映像と、それから40年後の村を紹介する。「とにかく形だけは残さないと、まず将来まで続けて事は無くなる」から、「それぞれに上手にやるというよりはとにかくまず一生懸命やる」と、歌舞伎の稽古に励む星長一氏。40年前の映像での彼は、出作り小屋を貸別荘に改築した、変化の象徴であった。

3年前まで立っていた舞台を下り、裏方で100

年近く使われている衣装直しをしている70代の平野幸子氏は、奥州安達ヶ原の「お谷」が得意演目だったが、「止められると困るから、後が続かなくなるから」と、役を引き継いだ40代の平野真美氏にアドバイスができない。「私なんかは厳しく教えて頂きたいですね」という平野真美氏は、指導をお願いし、「迷っていた所を指摘されたのでちょっと安心」して舞台に臨む。彼女の7歳になる娘も初舞台である。舞台は終わり、役が受け継がれた。舞台を終えた平野真美氏は、「子どももやるのであれば協力もしますし、自分もまたどんどん教わっているいろいろ勉強して頑張りたい」と語る。伝統はこうして受け継がれていくのである。

## 5. 地域財としてのアーカイブスの意味

そこにあるものは同じであっても、みる者のフィルターによって異なる世界が出現する。どこに力点を置くかは、その時代に特徴的な価値観によって異なる。

本稿は、檜枝岐に関する19本の映像から、山村が賛美された時代から貧しさが表象された時代へ、そして伝統賛美の時代への移り変わりを見てきた。論じてきたように、戦前、檜枝岐は尾瀬の山麓の桃源郷であった。高度経済成長期には、冬に陸の孤島となる山奥の米の実らぬ寒村であった。そこはかとなく過疎への不安が透けて見える一方で、「秘境」は人を惹きつける、魅惑的な枕言葉にもなっていた。「秘境・檜枝岐」は観光宣伝のフレーズとしてもしばしば用いられた。そして、1980年代からの内発的な地域づくりの時代のなかで、檜枝岐は独自の文化と伝統を現在に残す村として表象されるようになった。

自然のなかで営まれてきた生業、自給自足と地産地消、現在ならばスローフードと呼びうるような食文化、江戸時代から続く歌舞伎は、いまや観光を主産業とする檜枝岐の重要な資源となっている。この資源は、生活や文化を切り売りして生まれているのではない。場を共有し、経験を共有す

ることで、世代を更新しながら生まれ、引き継がれていくものである。ただし、全てが受け継がれるわけではない。変化のなかでこぼれおち、失われていくものがあり、環境の変化によって場と経験を共有できず、リアリティを欠いていくものがある。

映像には、離れていく過去のリアリティを現在に引き寄せる力がある。いまは故人となってしまう古老の語りや、若き日の父母や祖父母の姿、古い村の景観や生活など、その土地に生きた人生に学び、土地の自画像をくっきりとした輪郭で描き直すときに、「記録の保管庫」「記憶の保管庫」

としてのアーカイブスは、未来を示す温故知新の記録と記憶の羅針盤になるに違いない。

表1 檜枝岐関連視聴映像（NHKアーカイブスおよび檜枝岐村所蔵映像）

放送年月日	番組名	副題
1951/08/--	塚本作品・山岳フィルム (5)	～尾瀬沼・尾瀬ヶ原～（昭和26年）
1961/11/08	日本縦断	福島
1963/05/20	続・日本縦断	会津～東北編 (7) ～
* 1964	奥会津	檜枝岐から尾瀬へ
1967/02/27	新日本紀行	奥会津
1972/06/12	新日本紀行	出作りのころ～会津・檜枝岐村～
1986/07/04	にっぽん列島朝いちばん	自然ふれあいの旅 雨の檜枝岐にサンショウウオを追う ～福島県檜枝岐村～
1987/10/02	にっぽん列島朝いちばん	イワナ釣り名人 山小屋ぐらし～福島県檜枝岐村～
1989/10/27	きょうの料理	この土地この味 山人たちのそば料理 福島県・檜枝岐村
1991/05/18	日本列島ふるさと発スペシャル	檜枝岐歌舞伎～福島県・檜枝岐村～
1991/05/23	特選東北バラエティ	檜枝岐歌舞伎
1994/08/01	ひるどき日本列島	尾瀬・夏だより 福島・檜枝岐村
1994/08/02	ひるどき日本列島	遊ぼうよ檜枝岐村 福島・檜枝岐村
1997/07/11	水と漁の旅	山椒魚漁～福島県・檜枝岐川～
1998/05/30	小さな旅	村歌舞伎 ふるさと青春～福島県檜枝岐村～
1999/07/19	ふだん着の温泉	尾瀬の麓 父と子の湯～福島・檜枝岐温泉～
2000/04/19	今夜もあなたのパートナー I	そばの匠を訪ねて 平野八千代 福島県檜枝岐村
2004/04/29	ホリデーにっぽん	ふるさと歌舞伎 東京へゆく
2007/05/12	新日本紀行ふたたび	NHKアーカイブス 歌舞伎が伝わる村 福島県檜枝岐村

註：\*印は檜枝岐村所蔵。

表2 塚本作品・山岳フィルム(5)の内容

タイトル：尾瀬を回る旅		0'01～
尾瀬燧岳 1951年7月(Part1)	<p>ルートを示す地図。沼田駅からバスで戸倉へ。尾瀬に入る道。 リュックサックを背負った一行が三平峠へ。 「尾瀬沼が見えた」(テロップ) ニッコウキスゲの咲くなか、尾瀬沼を見ながら木道を歩く。 「大江川の畔り」(テロップ) 大江川では子供たちが川で遊んでいる。魚とり。釣りをしている人もいる。 夕焼けの尾瀬沼を手漕ぎの舟が進んでいく。 「尾瀬湖畔の朝」(テロップ) 霧がたちのぼる尾瀬、舟つき場、朝の湖畔を舟がいく。 「長蔵小屋を後に」(テロップ) 長蔵小屋の人が見送りに出ている。舟に乗って出発する。尾瀬沼の水面の水草。岸辺の植生、水鳥、燧ヶ岳を眺めながら沼を渡る。 「沼尻の湿原」(テロップ) ニッコウキスゲの咲く風景。池塘の脇を歩く。トンボが食虫植物につかまっている。池塘でアカハライモリを捕まえる。池塘を飛び越えようとして失敗、水の中に落ちてしまう。鳥居をくぐって燧ヶ岳へ登山。沼を見下ろす風景。残雪の燧ヶ岳。緑が濃い。岩の脇を抜け、ガレバを登る。 「燧ヶ岳祖嶺頂上△2346M」(テロップ) 山頂の祠。祠の脇の三角点 ルートを示す地図。 休憩している一行の脇を村の若い女性が通り過ぎる。女性の顔のアップ。 檜枝岐小屋、弥四郎小屋。 「下田代湿原」(テロップ) 湿原でトンボとり。浮島を揺らして遊ぶ。 「沼尻川を渡って」(テロップ) 丸太の橋を渡る。 「中田代の竜宮」(テロップ) 龍宮小屋。 「大堀川のほとり」(テロップ) 丸太の橋を渡る。ルートを示す地図。茅葺屋根の温泉小屋。温泉小屋の主人が見送りする風景。三条の滝への道しるべ。 「平滑ノ滝」(テロップ) 「愈々、燧ヶ岳北面の森林帯に秘められた数々の湿原を尋ねて」(テロップ) 温泉小屋へ15丁、檜枝岐へ4里3丁と記された道しるべ。リヤカーが並ぶ小屋。木端が敷かれた道。リヤカーに乗って。 「檜枝岐へ」(テロップ)</p>	2'15～
尾瀬ヶ原と燧田代 1951年7月(Part2)		13'35～
檜枝岐村と會津駒ヶ岳 1951年8月(Part3)	<p>村のロング 「此所は南会津 檜枝岐村」(テロップ) 村の地藏付近の風景。開村者の墓印の大木と村なみ。路傍の墓の脇を歩く村人。頭に手ぬぐいをまいた六地藏。大きな荷をかたいで歩く村人。家の中で作業をしている村人。堀にあるバツタリ、水屋。リヤカーで荷を運ぶ村人。</p>	22'57～



	そば打ち風景。そばはフキの葉で覆う。道端の風呂で入浴する村人。木端で いっばいの斜面の上に建つ小屋へ。杓子作りの風景。杓子を手に入れて小屋 から斜面を下る。大きなフキを持って橋を渡る。	
春雪の尾瀬 (昭和 38 年 5 月撮影)	木の伐採風景。パチゾリやオオゾリ。 春スキーの様子。 鉄砲を背負った村人。氷の張った尾瀬沼。スキーで歩く。	28'25~
尾瀬の秋	ルートを示す地図。紅葉。湿原。三条ノ滝。山の鼻小屋。板の橋。イワナ釣 り。池塘の脇を通り、浮島を歩いていく。	52'30~

出典) NHK コンテンツ基本情報に記載された「内容」に筆者の視聴情報を追記して作成。

注) 燧ヶ岳はタイトル、テロップで「燧岳」と記されているので、そのまま表記した。

## 注

- 1) 1934 年に日光国立公園に指定された。2007 年に日光国立公園から分かれ、会津駒ヶ岳や帝釈山、田代山など地域とともに尾瀬国立公園になった。
- 2) 「檜枝岐」と記されることもあるが、村名が「檜枝岐」なので、引用等を除き「檜枝岐」と表記する。なお、文中で檜枝岐村と記すときは自治体もしくは村域を、檜枝岐と表記するときは本村（集落）や社会関係を示すが厳密な区分ではない。
- 3) NHKアーカイブスは、1981 年から NHK が組織的に保存してきた番組を保存・活用・公開する「記録の保管庫」「記憶の保管庫」である（NHK 放送総局ライツ・アーカイブスセンター 2008：4）。1981 年以前の番組の多くは、収録に用いた 2 インチ幅の VTR が高価だったため放送が終わると「内容を消して何度も使用」していたこと、「映画と異なり、放送は文字通り『送りっ放し』で」番組保存の文化がなかったことから「消えていった」（同上：13）。
- 4) 本稿はトライアル研究第 3 期「テレビが『保護と観光のまなざし』形成に果たした役割分析と地域民俗資料としてのアーカイブスの可能性」（関礼子・星長一・平野勝）および科研費基盤研究（B）22402038「越境システムの進化制度論的展開とコミュニティ」（代表・丹野清人）の研究成果である。
- 5) 2012 年 3 月 14 日、星長一（檜枝岐村村史編集委員）、平野勝（檜枝岐村教育委員会）とともに実施したヒアリングによる。
- 6) このフィルムには、「学生アルバイト、尾瀬を行く」のタイトルがついている。企画は尾瀬沼山荘・平野長英。多くのハイカーが訪れていた尾瀬沼には手漕ぎボートや連絡船が浮かび、夏には多くの学生アルバイトが寝泊まりしていた。長蔵小屋の前の畑や、キャンプファイヤー、小屋じまいの頃に学生アルバイトが尾瀬のゴミ拾いをする様子などが描かれている。
- 7) 七入は、本村から離れた出作り地であった。冬に山中のムコウジロ小屋でつくった杓子やへらなどを背負って七入まで下ろし、七入から本村までリヤカーで運んだと記憶されている。おそらくはそのリヤカーを用いた「リヤカータクシー」であろう。
- 8) 1905 年に設立された日本山岳会発行の雑誌。
- 9) 1959 年完成、「規模と展望の良さでブームを引き起こした」（徳久編 1981：146）。
- 10) 括弧内は NHK TV 放送台本『日本縦断 第 24 回 福島』より引用。以下、同様。
- 11) 1960 年度から 1973 年度まで地方交付税不交付団体であった。
- 12) 正確には、村営林産所。1952 年に林業の機械化と村民の就労の場の確保を目的として設立された。1959 年度に新農村振興指定村になり、特認事業として設備更新を実施、一層の機械化をすすめた時期であることから、この設備更新を指して「製材所」と呼んでいると思われる。（檜枝岐村 1970：227）

- 13) 1960年に「茅葺屋根解消のための檜枝岐村住宅屋根用トタン板負担に関する条例」が制定され、1971年には村の民家全戸がトタン屋根になった。これは火災予防のための措置として行われた（檜枝岐村民俗誌編さん委員会監修、関編著 2014）。
- 14) 括弧内はNHK TV放送台本『続日本縦断 会津』より引用。以下、同様。
- 15) シトゲはオシトゲ八日（2月8日、12月8日）、えびす講（1月20日）、刈上げ九日（9月29日）などで食した。現在はそば粉と米でつくる。映像のなかのシトゲは丸めた「デッチ」（やきもち）で、普段食とされている（檜枝岐村商工会女性部 2009：11、13）。
- 16) これら自然保護の動向を含めた詳細な年表が、波戸場編（1984）に纏められている。
- 17) 観光映画コンクールは、1953年に国鉄、日本交通公社、全日本観光連盟主催で始まった。『観光』（1971）に掲載された「観光映画コンクール・メモ」によると、16ミリ映画は、登山や自然を好む人が趣味的に作成した、いわばアマチュアの山岳映画が主だったという。対して、観光映画は観光宣伝のための映画で、実際に人を観光にいざなうことが期待され、テレビ放送用に制作されるものもあった。また、受賞作リストをみると、自治体のほか、銀行や電力会社なども制作にあたったことがわかる。
- 18) 括弧内は『奥会津～檜枝岐から尾瀬へ』のナレーションによる。
- 19) 括弧内は番組のナレーションによる。以下で取り上げる番組についても、注記がないものは同様に番組のナレーションからの引用である。
- 20) 岡恵介（2008：12-13、37）によると、「山村」はジャーナリズムが生んだ昭和恐慌の頃に「疲弊した山間の村の呼称」で、その出自から負のイメージを持っている。加えて、高度経済成長下の「過疎」化現象が「山村」を行政課題にしてきたため、「不便で貧しい遅れた地」「過疎・離村といった負のイメージ」で捉えられてきた。岡は、高度成長下の日本の「秘境」へのまなざしは、開発が遅れた地域に向ける「郷愁と憐憫」であったと指摘する。
- 21) ディスカバー・ジャパンのキャンペーンは、旅で日本文化と自分を再発見しようという「美しい日本と私」がキャッチフレーズで、若い女性の旅ブームを一層、促した。
- 22) サンショウウオ漁は江戸時代から行われているが、檜枝岐村では大正時代末と比較的新しい時期に始まっている。なお、漁の詳細については檜枝岐村民俗誌編さん委員会監修、関編著（2012）、関（2013）を参照のこと。
- 23) 平野惣吉氏の山に生きた人生については、平野述・志村編（1984）を参照のこと。
- 24) ここでいう「山」は、戦後の開墾地である砂子平である。
- 25) 「山人料理」は、「村の料理を名物にしようというところから始まり、幾つかの候補の中から旅行作家の福村晃司氏のアドバイスで名付けられた」（平野 2014：3）。
- 26) 台本には「満喫！山里の夏」という副題がついている。
- 27) 1975年、全戸に温泉がひかれ、1983年には村営温泉浴場ができた（檜枝岐村 1987：71）。現在は3ヶ所に温泉浴場があり、観光客だけでなく村民も広く利用している。
- 28) このポスターは、村の歌舞伎伝承館「千葉之家」（2012年開館）に展示されている。
- 29) NHKのコンテンツ基本情報の「構成表」から引用。以下、同様。

## 参考文献

- 波戸場秀幸編 1984『尾瀬の足あと』 煥乎堂。  
 檜枝岐村 1970『檜枝岐村史』 檜枝岐村。  
 檜枝岐村 1987『建設の植音（村政独立70周年記念誌）』 檜枝岐村。  
 檜枝岐村民俗誌編さん委員会監修、関礼子編著 2012『檜枝岐の山椒魚漁（檜枝岐村文化財調査報告書1）』 檜枝岐村民俗誌編さん委員会。  
 檜枝岐村民俗誌編さん委員会監修、関礼子編著 2014

- 『檜枝岐の地名（檜枝岐村文化財調査報告書 2）』檜枝岐村民俗誌編さん委員会。
- 檜枝岐村商工会女性部 2009『食の菜四季 檜枝岐（30周年記念誌）』商工会女性部。
- 平野信元 2014「新年のあいさつ」『檜枝岐（檜枝岐村公民館報）』185：3。
- 平野惣吉述・志村俊司編 1984『山人の賦 I』白日社。
- 今野圓輔 1951『檜枝岐民俗誌』刀江書院。
- 小泉欽司編 1990『〔現代日本〕朝日人物事典』朝日新聞社。
- NHK放送総局ライツ・アーカイブス総局編 2008『NHKは何を伝えてきたか NHKアーカイブスカタログ—テレビ番組放送記録+番組小史 1953～2008』NHK放送総局ライツ・アーカイブス総局。
- 日外アソシエーツ編 2005『日本の写真家——近代写真史を彩った人と伝記・作品集目録』日外アソシエーツ。
- 岡恵介 2008『視えざる森の暮らし——北上山地・村の民俗生態史』大河書房。
- 大内秀邦 1965「文化映画」『キネマ旬報』391：94。
- 関礼子 2012「観光の環境誌 I——まなざされる国の生成」『応用社会学研究』54：15-41。
- 関礼子 2013「自然順応的な村の資源保全と『伝統』の位相——福島県檜枝岐村のサンショウウオ漁と人びとの暮らし」宮内泰介編『なぜ環境保全はうまくいかないのか——現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』新泉社。
- 菅豊 2000「在地リスク回避論」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 1』未来開拓大塚プロジェクト事務局：9-30。
- 杉本誠 1985『山の写真と写真家たち——もうひとつの日本登山史』講談社。
- 徳久球雄編 1981『山を読む事典』東京堂出版。
- 戸澤英一 1920「雑録○會津駒ヶ岳」『山岳』14-3：93（367）-102（376）。
- 塚本閏治 1941『日本の山々』山と溪谷社。
- 塚本閏治 1950『日本の山々 第2集』山と溪谷社。
- アーリ（Urry, J.）、加太宏邦訳 1995（=1990）『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』

法政大学出版局。

筆者不詳 1971「観光映画コンクール・メモ」『観光』37：69。

